**聖霊降臨節第６主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年６月23日**

**「すべては福音のために」**

**イザヤ書6章8節**

**6:8 そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」**

**使徒言行録16章1～5節**

**16:1 パウロは、デルベにもリストラにも行った。そこに、信者のユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父親に持つ、テモテという弟子がいた。**

**16:2 彼は、リストラとイコニオンの兄弟の間で評判の良い人であった。**

**16:3 パウロは、このテモテを一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。**

**16:4 彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を守るようにと、人々に伝えた。**

**16:5 こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに人数が増えていった。**

**共に読み進めています使徒言行録も16章に入りました。使徒パウロの第二次伝道旅行が始まりました。その出発の際に第一次伝道旅行を早々に離脱してしまったマルコを連れて行くかどうかをめぐってパウロとバルナバは激しく対立して、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ伝道の旅に出かけました。パウロはシラスを新しいパートナーに選んでアンティオキア教会を出発して、陸路でデルべにさらにリストラに行きました。その両方の町は第一次伝道旅行で訪れた町です。リストラを訪れた時の様子は14：8以下に記されています。パウロがユダヤ人たちから石を投げつけられて、死んでしまったかと思ったらすくっと起き上がって歩き出したという出来事がありました。そのような迫害にあった町にあれから数年は経過しているとはいえ再度訪れるのにはかなりの覚悟が必要でした。次は本当に殺されてしまうかもしれない、それでも私は福音を伝えるために、すべては福音のためにこの町に行くのだ、その覚悟を持ってパウロとシラスは訪れたのです。**

**するとその町に見覚えのある顔に出会いました。テモテという若者です。テモテは第一次伝道旅行の時にイエス・キリストを救い主と信じて洗礼を受けてキリスト者になったと言われています。この若者テモテは父親がギリシア人、母親がユダヤ人と1節に記されています。さらに後にパウロがまさにこのテモテに宛てて書いた手紙にテモテへの手紙というものがあります。そのテモテへの手紙Ⅱ1：5（391頁）には**

**「そして、あなたが抱いている純真な信仰を思い起こしています。その信仰は、まずあなたの祖母ロイスと母エウニケに宿りましたが、それがあなたにも宿っていると、わたしは確信しています。」**

**と記されています。テモテの信仰は彼の祖母ロイスと母エウニケから受け継いだ、3代にわたるキリスト者なのです。そして彼が幼いころから聖書に親しんできたことが同じテモテへの手紙に書かれています。3代にわたるキリスト者で小さなころから祖母や母によって聖書に親しみ聖書に通じている純真な信仰の持ち主です。父親はギリシア人でギリシア的教養を身に着けていて当時の公用語のギリシア語に堪能です。そのようにテモテは両親また祖母から多くの賜物を受けついだ有能な若者と言うことができます。その上彼は教会の兄弟姉妹から非常に評判の良い人物でした。評判が良いというのはそれだけで財産です。パウロはそのようなテモテをこれからの伝道旅行に連れて行きたいと願いました。パウロがそう願ったのは、パウロの頭の中には第一次伝道旅行で訪れた小アジアと呼ばれる地域だけでなく、さらにその先の伝道も視野に入れていたのではないかと思います。そして、もしかしたら、パウロは同じ若者であるマルコを育てることができなかった負い目を感じていて、このテモテという若者を一人前の伝道者として育てたいという思いもあったのかもしれないのです。**



**パウロはテモテを伝道旅行に連れて行くに際して彼に割礼を授けます。このパウロの取った行動は一見すると矛盾しているように思えます。パウロたちがこの後も「方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を守るように」人々に伝えますが、その規定というのが、15：28と29にあります、先にアンティオキア教会に伝えた規定です。すなわち「異邦人の救いに割礼は必要ない。ただ、ユダヤ人が避けている習慣を避ければそれでよい」というものです。つまり、パウロは異邦人に向かっては「割礼は必要ない」と言いながら、ギリシア人を父に持つテモテに割礼を授ける、言っていることとやっていることが違うような気がします。では、どうしてパウロはテモテに割礼を授けたのでしょうか。**

**それは「その地方にいるユダヤ人の手前」なのです。「え、世間体のため？あのパウロがそんな理由で？」と思われるかもしれませんが、ユダヤ人の手前と言っても世間体という問題ではないのです。テモテの父は皆が知っているギリシア人、その子どもであるテモテが割礼を受けていないとユダヤ人から受け入れてもらえないのです。具体的にはこれからユダヤ教の会堂で説教することもあるでしょうが、割礼を受けていない者は説教をすることが許されていなかったのです。ですから、どんなにテモテがイエス様の福音を語ってもユダヤ人からすると彼は単なる異邦人なのでその語る福音を聞いてもらえないし、そもそも語ることすらできないということにもなるのです。テモテ自身の救いには割礼は全く必要ないのですが、ことユダヤ人に福音を語るとなると割礼を受けていないということが妨げとなってしまうために、ただ福音のためにテモテに割礼を受けさせたのです。ユダヤ人に福音を語り、ユダヤ人を救いに導くために、さらに言えば一人でも多くのユダヤ人を得るために、一人でも多くの人を得るためにテモテに割礼を授けたのです。**

**コリントの信徒への手紙Ⅰ9：19～23（311頁）にこのようなパウロの言葉があります。**

**「9:19 わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。**

**9:20 ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。**

**9:21 また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。**

**9:22 弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。**

**9:23 福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」**

**これがパウロの伝道に対する熱い思いです。伝道者パウロの姿勢なのです。「ユダヤ人にはユダヤ人にように」「福音のためなら、わたしはどんなことでもします」「何とかして何人でも救うためです」これが若き伝道者テモテに割礼を受けさせたパウロの熱い思いです。一人でも多くのユダヤ人を救うために、さらには一人でも多くの異邦人を救うために、もっといえば一人でも多くの人を救うために、福音が語られその福音が届くように、そのためだったら私はなんでもする、すべては福音のために、この福音のためなら命すら惜しくない、その鬼気迫る思いがパウロの伝道者の姿勢なのです。そして、デルべでもリストラでもイコニオンでもピシディア州のアンティオキアでも福音が語られてパウロの思いは人々に伝わり福音が広がり教会は信仰が強められて人数が増えていったのです。救いへと導かれる人が次々に与えられていったのです。**

**「福音のためなら、わたしはどんなことでもします」「何とかして何人でも救うためです」**

**いったい何がパウロをそこまで突き動かすのでしょうか。パウロの原動力は一体何なのでしょうか。**

**それはパウロ自身がそのようにして救われたからです。かつて神の教会を迫害し、イエス様を迫害した律法学者の中の律法学者、ファリサイ派の中のファリサイ派のパウロです。自分は正しいと思いながら神様に対してまたイエス様に対して多くの罪を犯してきたパウロです。そんなパウロがイエス様の十字架の死の贖いと復活によって罪赦されて救われたのです。イエス・キリストが命を捨ててまでパウロを愛して下さったのです。こんな罪深い私が救われた、こんな私の救いのためにどんなことでもしてくださった、その計り知れない大きな愛によってパウロ自身が救われたからなのです。そのイエス様の十字架と復活の愛を何とかして一人でも多くの人に伝えたいのです。一人でも多くの人が福音に出会って、救いへと導かれるために。そのためだったら私は何でもします。イエス様のためだったら私は何でもします。生きるも主のため、死ぬも主のため。すべては福音のためなのです。**

**それはパウロだけではありません。ペトロもヤコブも、エルサレムの教会もアンティオキアの教会もそれ以外の教会も。そしてそれぞれの教会に生きるキリスト者も皆同じです。パウロの時代だけではありません。それから後の時代の教会はすべては福音のために歩んできたのです。イエス様の十字架と復活の愛によって罪赦されて救われた私たちキリスト者は、時代が違っても場所が違ってもすべては福音のために歩んできたしこれからも歩んでいくのです。**

**こんなに罪深い私が救われた、こんな私のためにイエス様は十字架に掛かって死んでくださった、その救われた喜びを一人でも多くの人に伝えたいのです。イエス様の十字架と復活の愛を何とかして一人でも多くの人に伝えたいのです。一人でも多くの人が福音に出会って、救いへと導かれるためだったら、私たちは何でもするのです。**

**「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」私たちはそれぞれの置かれた場所にあって、たとえ小さな業であっても、私たちは喜びを持って伝道の業に励んでいくのです。**